

建築家 伊丹潤の日本と韓国における設計活動 DESIGN ACTIVITIES BY ARCHITECT, JUN ITAMI IN JAPAN AND KOREA

建築デザイン分野 重光 理沙
Architectural Design Risa SHIGEMITSU

伊丹潤は日韓の揺れ動く歴史の中で、両国において活躍した在日韓国人の建築家である。1968年に伊丹潤建築研究所を設立し、活動の拠点を日本に置いたが、2000年以降は韓国での作品が大部分を占め、日本よりも海外で高い評価を得た。このようなアイデンティティが定まりづらく、日韓にまたがる活動は伊丹の本質を不明確にしている現状がある。本研究では伊丹の作品、評価と位置づけ、人脈について日韓を横断的に考察し、伊丹の生涯に渡る設計活動から建築家像を明らかにする。

Jun Itami who was active in both Japan and Korea during the swinging history of the two countries is a Korean architect in Japan. He established JUN ITAMI ARCHITECT A RESEARCH INSTITUTE in 1968 and based his activities in Japan, but his works in Korea occupied a big part of them from 2000 and he received high praise from abroad than in Japan. Thus his identity which is difficult to determine and activities in both Japan and Korea have made his essence unclear. This study shows his works, evaluations, position, and personal connections without distinguishing between Japan and Korea in order to reveal his image as an architect from Itami's design activities through his life.

1. 序論

1-1 研究の背景と目的

日本にとって韓国は最も近い隣国であり、お互いに影響し、意識し合ってきた。日韓はどちらの国の歴史、文化、伝統を語る上でも必要不可欠な程の密接な関係性を持ち、最も近い民族であると言って過言ではない。しかし、両国の関係は必ずしも良好な時ばかりではなかった。長きにわた

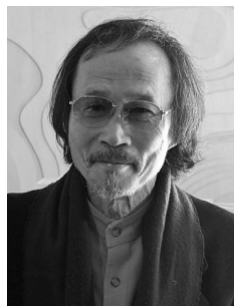


図1 伊丹潤¹⁾

り融和と分断を繰り返してきたが、近年ではグローバル化が進み、年を追うごとに心的距離は近づいている。

伊丹潤はこうした日韓の揺れ動く歴史の中で、両国において活躍した建築家である。伊丹潤(本名:庚東龍)は1937年に在日韓国人2世として東京で生まれ、1964年に武蔵工業大学(現:東京都市大学)を卒業した。1968年に伊丹潤建築研究所を設立してからは日本では、寡作ながら、住宅、店舗を中心とした良作を多く設計した。2000年以降は韓国での活動が大部分を占め、教会や集合住宅などを中心に40作品以上を残している。同時に海外での評価が高まり、大規模な個展の開催や様々な受賞が続いた。しかし、日本では建築雑誌等で海外での彼の活動が取り上げられる機会は少なく、晩年になるまで大きく評価されることはなかった。

また、伊丹が韓国で活躍した要因として、彼の持つ

在日韓国人という特性があることは見逃せない。李朝の建築や芸術に感銘を受けた伊丹は熱心に研究を続け、日本において複数の書籍を出版している。一方で日本で生まれ育ち、大学卒業まで日本で教育を受け建築を学んだ。こうした二面性を持つ経歴から国内においては、彼の建築は度々李朝的であると評され、韓国においては日本的と評された。そういったアイデンティティが定まりづらく、2カ国間にまたがった活動は、伊丹の本質を難しくしている現状がある。ゆえに日本と韓国にルーツを持つ背景が作品と設計活動にどのような影響や作用を与えたのかについて、明確にはなっていない。

本研究では、作品、評価と位置づけ、人脈について日韓を横断的に考察し、伊丹の生涯にわたる設計活動から建築家像を明らかにする。

1-2 研究の対象と方法

はじめに伊丹の商店建築と建築作品の特性について考察し、作品の変遷と設計手法を明らかにする(2章)。次に、日本において伊丹について書かれた言論について考察し、作品の評価や日本の建築界における位置付けを明らかにする(3章)。同様に、韓国における伊丹の受賞歴や言論について考察し、作品の評価や韓国の建築界における位置付を明らかにする(4章)。さらに、伊丹の人脈について考察し、作品にもたらした影響や日韓を始めとした世界への活動の広まりについて明らかにする(5章)。

1-3 伊丹潤の略歴

伊丹の略歴を表1に示す。伊丹は建築設計の道に進む以前の学生時代から芸術に造詣が深く、設計活動と並行し、自身も芸術家として個展を開催するなど、芸術分野でも積極的に活動していた。また、生涯に渡って教職に就くことなく、74歳で逝去するまで現役の建築家として国内外で活躍した。

表1 伊丹潤の略歴

西暦	記事
1937	東京都に生まれる
1964	武蔵工業大学建築学科卒業
1968	伊丹潤建築研究所設立
2002	ITMユ・イファ アーキテツク開設
2005	フランス共和国芸術文化賞「シュヴァリエ」を受賞
2006	伊丹潤・アーキテツク開設 金壽根文化賞(韓国)、アジア文化・景観賞(国連機関主催)を受賞
2009	済州国際英語教都市マスターアーキテクトに就任
2010	村野藤吾賞(日本)を受賞
2011	逝去(74歳)

2. 伊丹潤の作品

2-1 設計活動の推移

伊丹が逝去した2011年以前に竣工した商店建築・建築作品の全86作品を対象に数的に分析し、拠点や盛衰など、伊丹の設計活動の推移を明らかにする。

1) 作品数の変動と所在地(図1)

1970年代をピークに日本における作品数は減少している。1980年代、1990年代では平均で年間1件、2000年代以降では日本での活動は2件となり、日本においては一貫して寡作な建築家であった。一方、1970年代から韓国で作品を手がけ始め、2000年代では大部分の作品が韓国でのものである。総合すると、2000年代が伊丹の設計活動において最も活発であったことがわかる。作品の所在地は日本に拠点を置いた建築家でありながら、半数近くの作品が韓国のものであり、このことが伊丹の設計活動における特徴と言える。

2) 商店建築と建築作品(図2・図3)

1970年代、1980年代では商店建築が全作品の半数近くを占めたが、その後は減少している。このような若手の頃に商店建築の設計が多い傾向は、同世代の建築家でも同様に見られる。商店建築の70%以上が日本での作品であり、韓国では建築作品を中心に設計活動を行っていたことがわかる。

3) 建築作品の用途と規模(図4)

伊丹の作品で最も多い用途は個人住宅(住宅・セカンドハウス)、2位は集合住宅であり、住宅用途が全作品の45%近くに上る。韓国で竣工した集合住宅についてみれば、全ての作品の建築面積が2000㎡を超える大型の低層集合住宅であり、日本の作品と性格が異なる。また、韓国での作品は、ホテルやゴルフハウスといったリゾートに付随するものや、郊外に広がる大規模で贅沢な集合住宅など高級志向の作品が目立つ。

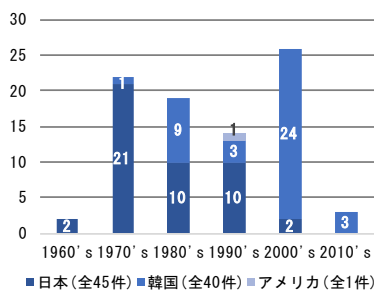


図2 国別にみる年代ごとの竣工件数

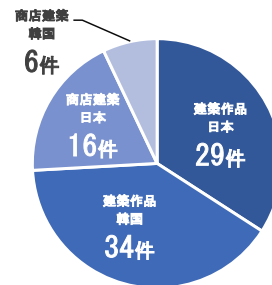


図3 国別にみる建築作品と商店建築の比率

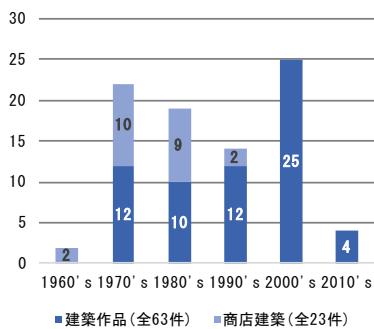


図4 分野別に見る年代ごとの竣工件数

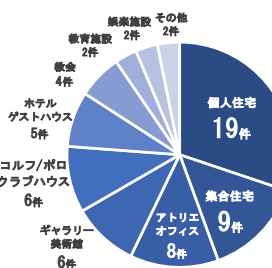


図5 建築の用途別比率

2-2 商店建築の特質

伊丹の商店建築について図面や写真をもとに各作品を考察し、経済性が重要視される商業建築における伊丹の設計活動の特性を明らかにする。

初期の作品はあえて古レンガなどの廃材や鏡面素材を用いて、時間の積層や印象的な空間を表現した。1978年からJAZZ CLUBを連続して手がけた。多様な素材使いは引き継がれつつ、ステージと客席の関係性や方向性をフロアのレベル差で巧みに表現し、音楽鑑賞に見合う空間を構成した。その後は、それまで用いていた素材やモチーフと新しい素材と組み合わせ、李朝風から和風、高級店から大衆的な店舗まで、それぞれの性格に合わせてながらも一貫して落ち着いた空間を設計した。

また、伊丹は机や椅子などのインテリアを可能な限り自身で設計している。インテリアと空間設計の両方を手がけることで、多様なアクティビティを可能にし、また空間に統一感を生み出したりしている。

伊丹は商店建築という決められた骨格の中に多様な素材を集積させ、独特の空間を構成した。素材への探究心、店舗の小規模な空間の中にあらゆるものを共存させる寸法感覚やディティールへのこだわりは、伊丹の商店建築の特質と言える。こういった商店建築の設計活動は、伊丹のマテリアルに対する鋭い感覚や人間と空間への深い洞察力を養ったと考えられる。

2-3 建築作品の特質

伊丹の建築作品について図面や写真をもとに各作品を考察し、日韓にわたる伊丹の設計活動の特質を明らかにする。

1968年に伊丹潤建築研究所を設立してから1980年頃まで、伊丹はRC造や木造の小規模な都市住宅を多く手がけた。初期の作品は、住宅のあり方に対するコンセプトを造形に頼り、建築の外形が平面や断面を決定していることがわかる。図形の集合体や曲線、シンボリックな形態など、豊かな造形力を感じさせる。しかし、形に対するロジックが感覚的であったと言わざるを得ない。

1975年に自身のアトリエである<墨の家>を発表する。この作品は造形ではなく、内部空間のコンセプトが明確に表現されている。その後も李朝の建築を参考に発想した「即廊下」や「余白」といった廊下と部屋が一体となった空間が次々に登場し、過剰な造形表現は少なくなる。こうした人の行動を喚起し、多義性を包含する空間構成は、それまでの作品に見られた造形的な要素と融合し、発展していく。

1982年に韓国において、伊丹にとって初めての大規模で公共性の高い作品である<温陽美術館>が竣工する。この作品は仕上げにレンガが用いられ、反近代的で土着的なものであった。その後はレンガや石、木といった原始的な素材が多用されるようになる。特に日本では外壁に石の野良積みという仕上げが多く用いられた。伊丹はそういった重く、野性的で温かみを感じる素材を通じて、周囲の都市や自然に対峙する建築を作ろうとした。

1990年頃からは重さから脱し、それまで用いてきた土着的な素材と鉄やガラスといった工業的な素材や線材を複合した軽快な作品が多くなる。また、内部空間は平面的に仕切りのない抽象化された構成となっていた。こうした空間のフレキシビリティと竹や木を用いた作品は、日本や韓国の風土や文化と親和性が高いものとなっていた。

1998年に<PINX クラブハウス>を韓国の済州島で竣工させる。その後は韓国での活動が活発化し、特に済州島の豊かな自然の中で多くの作品を残した。それまでのような周辺と対峙する建築ではなく、周辺環境に馴染み、場所と人が交感することのできる作品を多く残した。また、大規模で様々な用途の作品の設計を通じて、素材の使い方が整理され、開放的な作品へと移り変わっていった。

2-4 商店建築と建築作品との関係性

伊丹の商店建築と建築作品で培った手法は、互いに密接に関連している。商店建築では当たり前といえる1つの空間に対する強いこだわりが建築作品でも実践されている。建築作品が外観から内部、そしてディテールに至るまでどの解像度でも語られ得るのは、こうした商店建築を通じて養った鋭い素材と寸法に対する感覚があるからである。また、建築作品で生み出した多義性をもつ空間作りは商店建築に深みと説得力を与え、建築家という立場から商店建築への新たな試みとして成功したと言える。

2-5 小結

伊丹潤は生涯で建築作品と商店建築を合わせて全86作品を残し、その半数近くは韓国での作品である。伊丹は日本の建築家としては稀なシンボリズムという性格を持っていることと言える。伊丹は時代ごとに造形、空間、素材、場所性と変遷しながらも、これらの要素を象徴的に扱うことで作品の主題を表現した。時代ごとにシンボル化した主題は移り変わったが、それまでの主題が完全に刷新されるのではなく、伊丹の中で積層し、更新されていることが作品から読み取れる。そして、商店建築で得た解像度の高い、丁寧な設計手法は、場所や作品のスケールに関わらず、伊丹の作品に人間的な温かみや優しさを与えていると言える。



図6 建築作品の変遷

3. 日本における伊丹潤の位置付け

日本において伊丹について書かれた言論を考察し、日本での伊丹の評価や位置付けについて明らかにする。そして全体を俯瞰してみることで、日本の建築界と伊丹との関係性や距離感を示すことを目的とする。

3-1 若き建築家としての正統性と独自性

1968年に伊丹が独立してから、1980年初頭までの住宅作品の変遷については、多くの論考で<墨の家>が大きな転換点として挙げられている。芸術にも通じるオブジェ的な建築の形から建築の空間へ主題を移し、伊丹の独自性として李朝の気配が表現され始めている様子が共通して述べられていた。そういった住宅作品を通じた一種の実験は、当時の若手建築家として正統なアプローチであった。また、寡作ではあるが奇をてらわず住空間としての機能と向き合う伊丹の手法は、建築家としての素養が感じられると評されている。

3-2 素材派としての位置付け

1980年代から2000年代初頭までは、伊丹の作品における素材の存在感について共通して述べられている。石やレンガなどの重さを感じる原始的な素材で表現されるメッセージ性については、著者によって見解の違いが見られたが、伊丹が土着的な素材に傾倒し、時代の潮流に逆行していたと評されていたことが、共通して読み取れる。原始的な素材の与える素朴さは、伊丹のアイデンティティや韓国の古典的な建築と関連付けて語られ、反近代的な印象を与えていた。こういったような当時の軽い建築が流行していた日本の建築界との距離感が伊丹をアウトサイダーに位置づけた。2000年代に入り、伊丹の作品に徐々に木や竹などの線材が登場し、素材の存在感が薄まると場所性やアジアといった今までの論調とは異なる表現が使われ始めた。

3-3 伊丹潤の再評価

2008年に韓国での伊丹の活躍が大きく取り上げられ、逆輸入的に日本で伊丹の再評価が急速に進んだ。その後は、以前からの日本における寡作な建築家のイメージとのギャップに対する言及と作品の変化について共通して述べられている。作品についてみれば、明らかに重さや厳格さから脱し、素材が抽象化され、全体の1つの要素として捉えられている。加えて、伊丹の作品は場所に適合した開放的な物として論じられている。また、以前までの作品は古典的な李朝のイメージと結びついて語られることが多かったが、特に韓国の済州島での連作以降では、そういった傾向も薄まり、東洋やアジアにおける新しい表現の1つとして評されている。しかし、戦後から続く日本の平和主義的な風潮から、国際的建築家といった表現が使われ、伊丹に深く言及されているとは言い難い。

3-4 小結

どの時代においても伊丹の作品に漂う、伊丹の出自からくるアイデンティティへの問いについて言及がなされている。伊丹が意図しているかどうかは別として、作品に現れる空間性や素材の用い方をみると無関係とは言えないことは確かであり、そういった特質が伊丹をアウトサイダーに位置付けた。しかし、2000年代後半からは一転して、こうした伊丹の長年の問いが逆に人々に親近感を抱かせているきっかけとして作用している。こうした変化は、時代とともに日韓の関係性が接近したことや日本の国際化が背景としてあり、伊丹のある種の固有の問いが大衆の問いへと変わったことが大きい。

伊丹という1人の建築家の貫いてきた姿勢が時代に合わせて特殊解から一般解へと移り変わる様を鮮明に映し出すことが、伊丹が興味深い建築家である所以であると言える。

4. 韓国における伊丹潤の位置付け

韓国における伊丹についての言論や受賞歴、展覧会について考察し、伊丹の評価や位置付けについて明らかにする。そして全体を俯瞰してみることで、韓国の建築界と伊丹との関係性や距離感を示すことを目的とする。

4-1 受賞歴にみる伊丹潤

伊丹は韓国の建築に関連する賞の中でも、歴史ある大きな賞を多数受賞している。賞の主催者についてみれば、立場や組織が多岐にわたり、個人のアトリエで活躍する建築家からも大規模な公共建築を手がける建築士たちからも高く評価されていることがわかる(表2)。

また韓国建築家協会(KIJ)のホームページのヘッダーに伊丹の作品である<空の教会>の写りが使われていることにも、韓国の建築界における伊丹の作品の知名度の高さが現れている。

表2 韓国における受賞歴一覧

韓国建築家協会賞	主催：韓国建築家協会(KIA)
受賞作品：ゲストハウス OLD NEW(2001)・空の教会(2010)	
1979年に制定された韓国建築家協会賞は、毎年その年に完成した建築家の建築作品を対象に完成度が高く、優れた建築作品を7~10作品選定して建築家、建築主、施工者に賞与している賞である。	
韓国・名家名人賞	主催：月間インテリア(韓国のインテリア雑誌)
受賞作品：ゲストハウスPODO HOTEL(2002)	
1997年に制定された韓国・名家名人賞は、毎年12月にその年に月間インテリアに掲載された作品のうち優秀な作品を5作品程度、インテリア分野で活躍する審査員が選び授与している賞である。	
金壽根文化賞	主催：金壽根文化財団
受賞作品：三つの美術館「風・石・水」(2006)	
1990年に制定された金壽根文化賞は、建築をベースに様々な芸術分野で、当該年度に注目に値する活動を行った作家に授与される賞である。	
韓国建築文化大賞	主催：国土交通省/韓国建築士協会/ソウル経済新聞
受賞作品：器興SKアペルバウム(2008)・OBOE HILLS(2011)	
1992年に制定された韓国建築文化大賞は、人間が重視され、環境の調和がなされている作品を奨励することで、創作意欲を高め、建築文化暢達に貢献しようとする建設部が制定した賞である。1994年からは韓国建築士協会が単独で開催していた「韓国建築展」と統合され、建築分野の最高権威の代表的な展示会・表彰行事となっている。	

4-2 モダンコリアという位置づけ

2001年に竣工した<PODO HOTEL>をはじめとした済州島での活躍が盛んになった頃は、伊丹は独特のスタイルを持ち、位置付けが困難であると共通して述べられている。伊丹のスタイルとしては、日本と同様に素材性が挙げられ、自然との親和性や空間の意味性を深める抽象的な役割を担っていると評されている。加えて、伊丹の作品には現代と伝統、日本と韓国のように2つの概念の対立や融合の模索があり、それが作品に文化的メッセージを与えていると述べられている。こうした伊丹の独特のスタイルは時としてモダンコリアと呼ばれ、西洋のモダニズムの流れをくむ金壽根や金重業の系譜が主流の韓国の建築界において、新しい韓国の現代建築のスタイルの1つとして認識された。

一方で、一部の作品で使われている伊丹の伝統の表現について、韓国では必ずしも評価されていない。<温陽美術館>や<ゲストハウス OLD NEW>などの韓国の古典的な要素を用いた表現は、晩年の作品に比べると直接的で安直な伝統の模倣として捉えられていた。韓国の建築界では、建築における歴史の解釈と手法について、日本以上に厳しく論じられる傾向が読み取れる。

4-3 国際的な建築家像

伊丹の死後の2013年にランクインした「韓国の専門家が選ぶ現代建築 Best20」²⁾や2014年に開催された「伊丹潤：風の造形展」をきっかけに、伊丹の位置づけが再び試みられている。晩年の伊丹の作品は素材性から脱し、人間と空間や自然の媒介としての建築であると述べられている。特に済州島の作品には「風の造形」といった表現が用いられ、韓国の中でも特殊な済州島の風土に対する対応が綿密に語られている。また、2005年以降は、国際的な建築家として韓国内でさらに評価は高まった。それは、単に伊丹の国際的な評価の高まりだけでなく、韓国の建築界が韓国独自の歴史的な文脈を重要視する傾向へ変化したことも大きく関係している。一方で、特殊解のような立ち位置は、さらに助長され、民族主義的な傾向の強い韓国の建築界に伊丹の位置づけることをより難しくしたと言える。

4-4 小結

2000年以降から日本に先行して、伊丹の作品は高い評価を得ている。韓国の文化や風土に対して客観的な視点で向き合いつて再解釈し、メッセージ性のある新しくモダンな建築へと昇華するスタイルは、韓国独自の現代建築のあり方の1つとして説得力のある回答を提示している。しかし、国際的な活躍と共に韓国においても高く評価された一方で、閉塞的で社会性を重視する韓国の建築界の系譜に組み込まれて語られることはなく、伊丹は韓国人でありながら、異邦人としての扱いを受け続けていることがわかる。

5. 伊丹潤の人脈と活動の広まり

竣工した伊丹の作品は全てが民間の作品であり、公共建築のような公的機関が施主となるものはない。また、コンペディションを勝ち取り設計した作品などの突発的に繋がりがない施主から設計した作品もない。つまり、伊丹の設計活動は自身の人脈や作品の発表が発端となり、多くの作品が生まれている。ゆえに伊丹の持つ人脈を考察し、伊丹の作品にもたらした影響や設計活動の広まりについて明らかにする。

5-1 芸術分野における人脈

5-1-1 芸術をとりまく人物とつくる建築

芸術家としての顔を持つ伊丹は、アーティストたちとの太い人脈を持ち、それは、作品にも表れている(表3)。住宅作品に限ってみれば、住宅の必須用途ではないアトリエが、施主の属性によって設計の重要な主題の1つになっている。伊丹が独立直後の若手建築家であった時代に、作品の数を重ねることができたのも芸術をとりまく人脈は大きい役割を果たしている。

また、芸術に関連する施主は伊丹の建築を一つの作品として尊重し、制約の少ない設計環境を整えた。さらに、アトリエやギャラリー、美術館などの設計上、比較的自由度の高い用途の建築を手がける機会を伊丹に与えた。そうした芸術分野の人々との関係性から生まれた作品は、伊丹を語る上で欠かすことのできない重要な転換点に位置付けられたり、その後の作風を左右したりする作品となっている。

表3 芸術分野に関する施主の作品一覧

施主	作品名	用途	設計依頼の経緯
アーティストの夫婦	余白の家Ⅲ(1986)	Residence+Salon	見知らぬ関係だったが、伊丹の事務所に突然の電話があり、依頼された。
画家：張旭鐘	張旭鐘記念館(1986)	Atelier+Residence	
画家：パク・デソン	画家のアトリエ(2003)	Atelier+Residence	
画家：脇田和	余白の家Ⅰ(1974)	Residence+Atelier	
画廊オーナー：ウ・チャンギユ	學古齋(2004)	Gallery	水墨画家のムン・ボンソンの紹介
芸術関連：知人	開かれた意の家(1973)	Residence+Atelier	
古美術商：藤田千代子	天平堂(1992)	Gallery	京朝東山の天平堂の長年の顧客だった伊丹に新店舗の設計を依頼した。
彫金作家：石山麗子	芦屋の家(1974)	Weekend House	彫刻家の藤根伸夫が伊丹の事務所に持ち込んだ仕事。
彫刻家：速水史郎	彫刻家のスタジオ(1985)	Art Studio+Residence	1980年代に新館のギャラリーで出会う。レストラン「トランク」で食事する仲になり、アトリエの設計を依頼。
DUSONグループ社長：キム・ヤンス	Cloud I(1984)	Bar+Restaurant	
	Parao I(1984)	Fashion Shop	
	Cloud II(1986)	Restaurant	Paraoの2作目
	Parao II(1986)	Fashion Shop	Closedの2作目
美術館館長：キム・ウォンデ	温陽美術館(1982)	Museum	アントニン・レーモンドの伊豆別荘に訪れた際、温陽博物館のオーナー夫婦が招待されており、面識があった。その後、ソウルの美術館で「日本の建築家+ローイング展」を開催した際、再開し、依頼を受けた。

5-1-2 伊丹を支えたキュレーター

フランス国立ギメ東洋美術館での伊丹の建築家と芸術家という二面性を表現した個展開催をきっかけに、ドイツ・中国・韓国でも展覧会を開催している。それらは、伊丹と古くから交友のあった上田雄三というキュレーターのアジアを中心とした人脈と実績に支えられている。建築家は純粋に設計活動を行っているだけでは、評価にはつながらない。こうした伊丹を正当に評価し、作家に合わせた展覧会を企画、プロデュースする人物との人脈が、伊丹の国際的な評価を高めることに貢献したと言える。

5-2 韓国における人脈

5-2-1 経営者と高級リゾート建築

韓国における人脈によって、伊丹は 2000 年以降に急速に活躍の場を広げる。日韓で会社経営をしていた金原弘周が伊丹に依頼した済州島での<PINX シリーズ>が発端となり、経済力と決定権を持つ韓国の経営者たちに人脈が広がっていった。こうした経営者は海外に留学経験を持ち、建築を価値のある作品と認識する素養があった。当時の韓国社会における高所得者層のニーズが、立地性や利便性から韓国独自の高級感へと移り、経営者たちはそういった建築を求めている。伊丹が韓国で活躍するに至ったのは、国際的な評価を持ち、日本でも活躍した韓国人の建築家としての肩書きだけでなく、そういった韓国の需要と伊丹の作品のスタイルが合致したからであると言える。

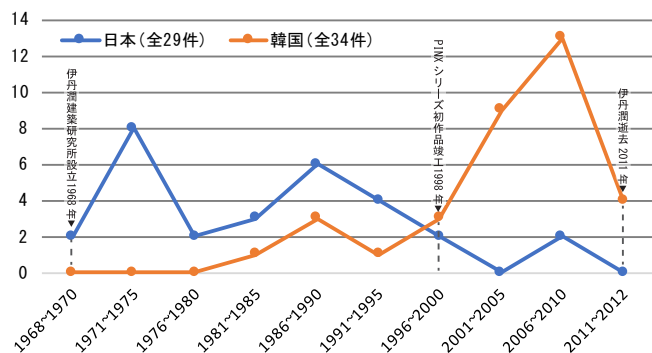


図7 日本と韓国の竣工建築作品数の推移

5-2-2 作品の質を支えた娘と韓国支社

伊丹は 2001 年に幼少から韓国で育った娘のユ・イファを中心として、実際に単独で仕事を受注できる程に韓国に根ざした支社を置いた。こうした現地を熟知した人脈と基盤は、伊丹のような日本を拠点に活動した小規模なアトリエ事務所が、海外で急速に活躍の場を広げることを可能にした。また、そうした韓国のブランチと連携した設計から施工までを一貫して監理する設計体制は、大規模な作品が急増した状況下であっても、韓国で質の高い仕事を可能にした。伊丹の建築が安定して評価され、施主から信用を得ることのできたのは、こうした韓国での基盤が大きな要因の 1 つであると言える。

5-3 小結

伊丹の人脈が生み出した施主は伊丹の作品の良き理解者として、伊丹の設計活動を支えていた。こうした理解ある施主を長きにわたって獲得できたことが、伊丹が世間の流行や意見に惑わされることなく、独自の道を進むことができた要因と言える。

また、伊丹が海外で評価を高め、基盤のない韓国で成功を収めることができたのは、建築作品の魅力だけでなく、伊丹を熟知し、サポートする人物の存在が大きいことがわかる。

6. 結論

伊丹は社会に対して新しい生活スタイル、コミュニティのあり方、構法や構造を提案する公共的でアカデミックな作品をつくる一般的な建築家ではない。伊丹が重要視したことは社会性や外部環境ではなく、自らの内から発生する問いである。言い換えれば、伊丹が追求したのは共感ではなく、真理である。それは、時としてモダニズム建築のあり方であり、半永久的に残りうる建築の姿であり、真のオリジナリティであった。こうした伊丹の自立的な設計姿勢は、自己表現を創造の根幹とする芸術家と近いものがあると言える。ゆえに伊丹の作品が建築にとどまらず、芸術作品としての性格も強めている。

また、伊丹はこういった自己の問題提起に対する答えを建築の共通言語である造形や素材、場所性を象徴化する手法を用いて、人が感覚として捉えることのできるスケールにまで還元している。西洋的とも言える象徴主義的な手法は、比較的シンプル構成でありながらも、作品に強いメッセージ性を持たせている。加えて、伊丹の作品には商店建築で培われた細部と素材に対する寸法感覚と、人間の活動をシークエンスで演出する空間の構成力が合わさっている。ゆえに、国籍を問わず、誰しもが理解することのできる西洋的手法を用いた単純明快な構成でありながら、哲学的で人間味のある暖かな空間になるのである。

こうした伊丹の独特な設計姿勢と設計手法は、日韓のどちらにも完全に帰属できない環境でこそ培われたと言える。伊丹の作品は、日本や韓国の古典的な建築の形を用いることなしに、東洋を彷彿とさせる土着的でミステリアスな雰囲気醸し出す。伊丹が国際的に高く評価された理由は、西洋の流れを汲んだ現代建築として表現された東洋性にある。

これまでも時代によって建築は様々な役割を担ってきた。今日の成熟した日本や韓国において、建築に求められているのは、世界に引けを取らない技術や公共性だけではない。国や地域で定義されづらくなった帰属意識の拠り所となる、現代に沿った民族の伝統や文化が再解釈されたエモーショナルな体験の場としての役割もまた求められつつある。だからこそ、伊丹潤の一貫して自問自答の中から生まれた答えを建築を通じ、人間の感触として表現した設計姿勢は、日本と韓国にとどまらず、今まで以上に国際的に活躍の場を持ち得る現代の建築家の 1 つの回答と言える。

注釈

- 1) 写真は倉方俊輔の撮影による。
- 2) 東亜日報 2013 年 2 月 5 日 HP より
「都市の美観損なう公共の建物…最悪のデザイン 13ヶ所が政府発注」

参考文献

- 1) 伊丹潤『Architecture and Urbanism 1970-2011 伊丹潤の軌跡』(HANEGI MUSEUM クレオ、2011 年)
- 2) 古谷誠章『十二組十三人の建築家 -古谷誠章対談集-』(LIXIL 出版、2014 年)